



発掘! さわめびと

制作歴10年。ミニチュアの三重塔、五重塔づくりに精魂を傾ける元大工職人。



新津 新作さん

1950年小海町生まれ。20歳の時、旧八千穂村の大工に弟子入り。以後、40数年間大工の他、造成、基礎、鉄骨、壁、屋根、塗装など建設業全般に携わり、建設資格のほとんどを取得。10年前から三重塔、五重塔作りを始め、これまでに手がけた塔は7つ。現在は町内の企業に勤めながら、制作活動が続いている。畑仕事も趣味で、約30種類の野菜を栽培。3人の子供さんはそれぞれ独立(孫7人)、今は奥さんと2人暮らし。高野町在住。

「私はね、一週間か二週間ですることができるような物じゃ面白くない。しかも、それを見た人がたまげてくれるようなものじゃなきゃね。人にびっくりしてもらおうのが私の趣味ですから(笑)」

覆

っていたカバーを取る
と現れた三重塔。高さ
は大人の背丈ほど。鈍
く輝く銅板の屋根、重厚感が漂
うケヤキの外壁など、圧倒的な
存在感、迫力だ。

翼を広げたような、微妙な反
りを持つ軒、部材が複雑に入り
組んだ木組み、所々に刻まれた
動物の彫刻など、細工は精緻を
極める。

「数えたことはないけど、すご
いパーツの数だと思いますよ」
と、人なつこい笑顔で話す新
作さん。

木工だけではない。相輪と呼
ばれる、金属の尖塔の溶接・加
工も自らの手による。人の手は
一つも借りていないというのが
新作さんの自慢だ。

「人の手を借りたんじゃない、自分
で作ったとは言えないからね」

+

新作さんが三重塔作りを手を
染めるようになったのは十年ほ
ど前のこと。きっかけは「ケヤ
キ(樺)」だった。

「ケヤキの木目の美しさが気に
入っちゃってね。しかもケヤキ
は硬くて粘り気があるから、こ
まかい細工をしても割れたりゆ
がんだりしないですよ」

ただ、初めから三重塔を作り
始めたわけではない。最初はテ
ィッシュボックスやサツカーボ
ールの貯金箱、神棚といった小
物。ティッシュボックスは息子
さんの結婚式の際、親族の引き
出物に二十数個作った。

だが、作ればそれなりのもの
ができてしまう。そのことに新
作さんは飽き足らなさを感じる。
器用さゆえの悩みかもしれない。

そんなとき、三重塔が閃いた。
「職人としてあちこちに家を残
してきたけど、まだオレにはこ

れだけの腕があるんだぞ、とい
うところを見せたかった。じゃ
あ、ちよつと高度なものに挑戦
しよう」と

何百年の間、地震や台風に
耐えてきた三重塔——新作さん
はそれに惹かれた。そうして初
めての作品、薬師寺の三重塔が
できあがる。

「私はね、一週間か二週間です
できるような物じゃ面白くないん
ですよ。長時間かかる、手の込
んだものじゃなきゃ面白くない
しかも、それを見た人がたまげ
てくれるようなものじゃなきゃ
ね。人にびっくりしてもらおうの
が私の趣味ですから(笑)」

完成までに要す日数は一年。
細かい作業だけに、つねにケガ
の危険が伴う。

「でも、ほらこの通り、どこも
欠けてないでしょう?」

と、新作さんは、これぞ男の
手というような、骨太の立派な
手を差し出した。

+

三重塔を作るにあたっては、
現場に何度も足を運んで寸法
を測ったり、写真を撮
る。複雑に見えるところ
も、長年大工をやっ
ていた勘で、だいた
いの見当はつく。ごく簡
単な図を描くこともあ
るが、設計図はすべて
頭の中だ。

「作る前に思い描いて
いた物とほぼ同じもの
ができるね。でも、一
日ですることなんて、

目に見えないくらいごくわずか
目も疲れるし、長時間はできな
いので、少しやっつては畑仕事を
したりしています」

毎年秋「佐久穂町民文化祭」
に出品しているが、新作さんの
作品は何と毎回「審査外」だ。

「最初のころはたしか賞をもら
ったような気がするんだけど、
どういうわけか、いつのまにか
審査外になっちゃってね(笑)」

理由は、おそらくレベルが高
すぎるからではないかと思われ
るが、「賞はさておいて、みな
さんに見てもらいたい」という
気持ちから、毎年出品している。

「前から作ってみたいと思っ
ているのは松本城。ただ、私、瓦
が焼けないんでね(笑)」

と、残念そう。すべて自分の
手で作る、が基本だからだ。

作品を眺めながら、ケヤキの
美しさを力説する新作さん。

「結局は、ケヤキに取り憑かれ
ているのかもしれないね。でも、
こうやってカバーを取って見て
みると、自分でもびっくりする
ね(笑)」



自作の三重塔、五重塔に囲まれた新作さん。一緒に並ぶのは新海三社神社(佐久市)の三重塔

●取材・文/中村仁(ライター)、八千穂高原在住